

## 山梨県若手研究者奨励事業 研究成果概要書

所属機関名

帝京大学文化財研究所

職名・氏名

助教・赤司千恵 ㊞

### 1 研究テーマ

シルクロードと果物利用史

### 2 研究の目的

中世シルクロード沿いの遺跡において、どこで、いつ、どんな果物が、どうやって利用されていたのか、食文化の中のどんな位置づけにあったのか、そこに地域性が見られるかどうかについて、植物考古学と文献資料からアプローチし、シルクロード交易がもたらした異文化交流の影響の実体を明らかにすること。

### 3 研究の方法

植物考古学からは、キルギスとアゼルバイジャンの中世の都市遺跡で出土している植物種実を分析し、どのような種類の植物が利用されていたかを調べた。その他の同時代遺跡の発掘報告書からも、出土植物のデータを収集した。文献資料からは、中世アラビア語やペルシャ語の料理書などから果物のさまざまな利用法の記述を抽出した。両者を組み合わせて当時果物がどのように利用されていたのか、そこに地域性が見いだせるかどうかを検討した。

### 4 研究の成果

アク・ベシム遺跡

アク・ベシム遺跡の出土果物

- ・ブドウ
- ・リンゴ

#### 留意事項

- ① 3枚程度で作成してください。
- ② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。

- ・ナシ
- ・ザクロ
- ・サンザシ
- ・バラ科果実
- ・メロン
- ・スイカ

アク・ベシム出土の果物を、料理書のレシピに出てくる果物と対照してみると、当時一般的だった果物の多くをカバーするような、広範囲の果物を利用していたことが判明した。ただし、液果が多く、ナッツ類が少ないことが特徴として挙げられる。

ブドウ種子については、大小の2種類が確認された（大型：タイプA、小型：タイプB）。別品種という可能性もあるので、帝京大学医学部との共同研究で、DNA分析を行うことにした。通常、遺跡から出土する植物遺存体は炭化しており、遺伝子情報が失われているが、アク・ベシムの果物遺存体の多くは、井戸状の深いピットの底部から非炭化の状態で見ついているため、DNAが抽出できる可能性が高い。当時のブドウの遺伝情報を知ることが、現在の栽培品種との関係、さらには山梨の甲州ブドウとの関係にまで迫れる可能性がある。

アク・ベシム出土の植物遺存体の分析はまだ進行中であり、ソグド人と唐の勢力との間で、または宗教が異なる集団の間で、植物利用の比較ができるようになると、集団による果物利用の違いがより詳しく分かってくる可能性がある。さらに、時期による植物利用の変遷も、今年度の発掘により解明できると思われる。

## シエムキール遺跡

### シエムキール遺跡出土の果物

- ・コーネリアンチェリー *Cornus mas*
- ・モモ *Prunus persica*
- ・Prunus 属 *Prunus* sp.

シエムキール遺跡では、コーネリアンチェリー (*Cornus mas*) が破片含め 150 点出土している。コーネリアンチェリーはミズキ科の果樹で、フランス、イタリア、東ヨーロッパ全域、黒海沿岸、コーカサス地方など、標高 1500m までのさまざまな環境下に分布する。赤い実には酸味が強く独特の風味があるが、生食、ジャム、コンポート、ワインの香りづけ、薬などの幅広い利用法があり、現在のアゼルバイジャンでは馴染み深い果樹である。シエムキール遺跡の出土例は、放射性炭素年代測定による 11~12 世紀半ばという年代が得られており、アゼルバイジャンでも古い例の一つである。

現在、コーネリアンチェリーを利用している地域には偏りがあり、コーカサスやバルカン半島では切手やお祭りのシンボルにもなるなど郷土食的な果樹であるのに対し、それ以

### 留意事項

- ① 3 枚程度で作成してください。
- ② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。

外の地域ではあまり栽培されない。栽培環境が限定されるわけではないにも関わらず、世界的に食べられているブドウやモモとは異なり、地域色の強い果樹の一つと言える。またコーカサスとバルカン半島との間でも、その利用文化の形成史は異なっていたようである。バルカン半島では中石器時代の遺跡からもコンスタントに出土しているのに対し、コーカサスでは今のところ、中世より古い出土例がない。こういった地域色の強い果樹利用文化がどのように形成されてきたのかを検討することは、異文化接触のあり方を考察するうえでも大いに示唆を与えてくれると考える。

## 5 今後の展望

中世シルクロードの遺跡では、多種多様な果物が供されていたこと、広域で普及している果物がある一方で、限定的な地域社会で消費される果樹もあることが分かった。

また、果物類の遺存体の種類は、地域や時代による傾向がつかめる状況にはまだなく、その理由の一つは発掘時の植物サンプル取り上げ状況、二つ目には発掘件数の少なさにあると思われる。発掘件数がまだ少ない中央アジアにおいては、植物遺存体のシステムティックなサンプリングがされていない遺跡が多い。

その点でキルギスのアク・ベシム遺跡は、現在発掘中の遺跡であり、目的に沿ったサンプリングをすることが可能である。2022年には、2年間の中断を余儀なくされてきた発掘調査を再開する予定である。特に興味深い調査対象は、東方キリスト教会の発掘である。アゼルバイジャンのシェムキール遺跡も、Huseynli氏らにより調査が続けられており、今後さらにサンプル数を増やして分析ができると思われる。

## 6 研究成果の発信方法（予定を含む）

2021年10月31日、日本植生史学会第36回大会において、口頭発表「コーネリアンチェリー（*Cornus mas*）の利用史」（Namiq Huseynliと共同）、およびポスター発表「中世シルクロード交易都市の食文化」（中山誠二と共同）を行った。キルギスの遺跡での分析結果の一部は、帝京大学文化財研究所研究報告、およびアク・ベシム遺跡発掘報告書で報告済である。また、山梨文化財研究所の所報60号において、「シルクロードと果物利用小史」として、アジア各地の現代と過去の果物利用に関するコラムを寄稿した。コーネリアンチェリー利用史については、引き続きHuseynli氏との共同研究を進め、『日本植生史研究』に投稿する予定である。

今後は2022年6月13～17日の国際古民族植物学会（チェコ）、および7月10日の日本西アジア考古学会（帝京大学）で、キルギス中世の植物利用について発表予定である。

### 留意事項

- ① 3枚程度で作成してください。
- ② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。